

被災地巡検で得た学び

被災地巡検についての案内を聞いたとき、初めはあまり関心を持たず、参加もしないつもりでいた。しかし友人からの誘いで、部活での思い出作りに、と軽い気持ちで参加を決めた。ところが事前研修が始まるとそれまでの気持ちは一変した。ここからは事前研修、被災地巡検でのそれぞれの学びと、全日程を終え帰ってきた今感じていることについて紹介する。

まずは事前研修について述べようと思う。私は事前研修で石巻市立大川小学校についての調べ学習を担当した。衝撃的だった。私はこれまで、こんなにも悲惨な出来事が起きていたことを知らなかった。この時、私はようやく防災の大切さを知り、向き合わなくてはならないと感じた。それと同時に、もっと震災について、そして防災について知りたいと思った。

ここからは実際に被災地を訪れてみて学んだこと、感じたことについて記述する。

まず私たちが訪れたのは、私が調べ学習を担当した大川小学校だった。辺りは静まり返っていた。そこでは大川小学校に通っていた娘さんを亡くした佐藤敏郎さんという遺族の方からお話を聞くことが出来た。覚悟はしていたつもりだったが、実際にその遺構を見たときの衝撃は言葉に表せないほどだった。佐藤さんはまず初めに、私たちに、この辺りには家や店が立ち並んでいて、賑やかな場所だったと説明してくださった。だが、今辺りを見渡してもただ何も無い平地とそれを囲む山が見えただけだった。その後佐藤さんは実際に小学校を案内してくださった。そこで見たあるパネルに書かれた短い文を私は忘れることが出来ない。校庭は今にも遊んでる子供たちの声が聞こえてきそうだった。そんな校庭に立って、佐藤さんは「大川小学校に娘が通っていたことを話す時、『あの』大川小学校ですか？と言われる。でも『あの』ではない当たり前の日常があった。『被災地』と呼ばれる直前までは『被災地』ではなかった。」とおっしゃった。私はこれを聞いてはっとした。震災についてどこか他人事のように捉えていたが、自分の生まれ住んでいる町、通っている学校で、今同じようなことが起きるかもしれないのだ。いつ自分の故郷が被災地と呼ばれるようになっても不思議ではないのだと恐怖を感じた。そして佐藤さんは「死にたくない、死なせたくない防災をしなくてはならない」と教えてくださった。防災について考えるにあたり、自分や大切な人を含まなくてはならない。それは辛いことだが、ハッピーエンドを想定し、備えなくてはならない。これらの話を聞いたからには、私はこれから防災について真剣に向き合い、そしてこの思いを誰かに伝えなくてはならないと感じた。



続いて私たちは気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を訪れた。震災の被害を受けたそのままの姿の気仙沼向洋高校はとても悲惨な姿をしていた。窓ガラスは1枚も残っておらず、泥まみれになって散らかった教科書が風でパラパラと音を立てていた。津波はこの校舎の4階

にまで届いたようだ。目の前の景色が現実のものだとは信じられなかった。しかしそれと同時に、震災は信じ難いような現実を生み出してしまうのだと実感した。屋上に上がると、そこから中庭を見渡すことができ、そこには1本の木が立っていた。卒業生が植えた木で、津波の被害に遭っても折れなかったそうだ。私はその木を見て涙が溢れそうになった。その木には被災しても折れない地元の方たちの意志が表れているように感じた。そして校舎の中には震災前の、ありふれた日常の様子を切り取った写真が並べられていた。私たちが明訓で過ごしている日々となんの代わり映えもなく、ただただ幸せそうだった。そんな日常を奪った惨い出来事を、絶対に風化させてしまっはいけないと思った。



2日目、私たちは荒浜地区へ向かった。そこは広大な荒地が広がっていた。人を見かけることもなく、強風によって砂埃が舞っていた。津波の被害にあった住宅の基礎だけが剥き出しになって残っていた。そこは復興の難しさを物語っているようで、寂しい場所だと感じてしまった。

次に私たちが向かったのは名取市震災復興伝承館、そして閑上地区の散策だ。そこは比較的復興が進んでいる地域でにぎわいもあり、大きな川も流れているのどかな場所だった。だがその川が震災では人々の命を奪うものと化してしまったのだ。閑上地区はその漢字にも現れているように、昔から水害の多い地域でもあった。また、地震発生から津波が来るまで1時間6分もあった。しかし東日本大震災での犠牲者は約700人（住民全体の約1割）と決して少なくはないのである。それにはいくつかの要因があった。そのなかでも大きな要因は、これまでも津波が来たことはあったが大した被害が出なかったため今回も大丈夫だという思い込みが年配の方々を中心に広まっていたというものだ。そのため避難をしないと決めた方も多かった。また、そのように安全だと思い込んでいるお年寄りを住宅まで説得しに向かった消防やしの職員らが、説得している最中に津波に巻き込まれたというケースもあったそうだ。この事実を知り、私は自分の避難をしないという決断が周りの人も巻き込んでしまうということに気づいた。反対に、自分の避難をするという行動は周りの人を助けることにも繋がる。だからこそ自ら率先して避難することが大切なのだ。現在、閑上地区では津波対策が進められている。例えばマンションには外に階段が設置されており、マンションの住民以外でも高い場所に避難できるようになっていた。また、その対策や地価の安さなどもあって若い人々がこの地に多く移り住んでいる。このまま復興が進んでいき、かつてのにぎわいが戻ってくることを願うばかりだ。



続いて訪ねたのは東日本大震災・原子力災害伝承館だ。この建物がある双葉町は東京電力福島第一原子力発電所が位置している。2022年8月30日に避難指示区域が解除されたが、未だ復興は進んでおらず人のいない静かな町だった。伝承館内には様々な展示物があり、どれも衝撃的な事実を突きつけてくるようだった。特に実際に身につけられていた防護服などの展示は、とても綺麗とは言い難い状態で当時の大変さを物語っており、とても心が傷んだ。また、私たちは双葉町と同じく帰還困難区域となった富岡町に住んでいた語り部の方からお話を聞くことが出来た。講話の中では当時何が起きていたのか、そしてそれから今日に至るまで何があってどんな課題が残っているのかなどについて教えてくださった。立ち入り禁止となって行方不明者の捜索すらできずに立ち去ることしかできなかったこと、たくさん動物たちが殺処分されてしまったこと、どれも残酷で胸が苦しくなった。私はその中でも特に心に残っている言葉がある。それは「原子力災害は終わっていない・わかりにくい災害である」というものだ。今も尚、放射線による健康被害や故郷に帰ることのできない苦しみを感じ続けている人がいるのだ。根拠の無い風評被害も残っている。私は被災者の悲しみを完全には理解することができない。だが、現地の方々がこうして伝承館を創り、伝えていく、そして復興を進めていく努力をしているのだ。私も、少しでも伝えるための手伝いをしたいと、そう思った。

被災地巡検の中で最後に訪れたのは震災遺構・浪江町立請戸小学校だ。周りには何も無く、ぽつんと建っているこの小学校を遠くからでも見ることができた。ここは福島第一原発とほど近い場所であり、しばらくの間立ち入ることのできなかったエリアなのだ。また、海からわずか300mのところの位置しているが、100名ほどの児童・教職員全員が無事に避難することができた「奇跡の学校」と呼ばれている。この遺構にも震災当時の様子がそのまま残っている。なぎ倒された大きな機械。奥の方で色々な物がぐちゃぐちゃになった給食室。どれも津波の威力の恐ろしさを示していた。卒業証書授与式という文字が掲げられたステージと、人の立ち入ることが出来ないほどに歪んだ体育館の床は忘れることができない。卒業をまじかに控え、それなのに証書を受け取ることのなかった卒業生のことを思うと胸が締め付けられる。だが、この遺構に残されているのは過去の残酷な出来事だけではなく。ある教室には黒板いっぱい復興へのメッセージが書かれていた。またある教室には震災当時浪江町の小学生だった人々が書いた作文が貼られていた。未来への希望を感じることが出来た。右の写真は、そんな希望に溢れた2階のある教室から私が撮った写真である。私はこの景色をととても美しいと感じた。ここに通っていた子供たちはきっと、私が今見ているようなのどかで穏やかな海を見ていたのだろうな、と思った。そんな海が自分たちの生活を壊してしまうだなんて考えたくもない。しかし自然の脅威は恐ろしいもので、人間の想定を優に超えてしまう。防災は当たり前の幸せな日常がなくなることを考えなくてはならないが、その重要さを奇跡の学校から学ぶことができた。



ここで帰りのバスでのことについても書き記したいと思う。そこでは一人一人がこの被災地巡検を通して感じたこと・学んだことを話す時間が設けられた。各々が話すのを聞く中で、自分にはなかった考え方を知ることができた。また、改めて全体で防災の意識を高めていこうと一丸となったような感じがした。そんな有意義な時間を過ごすことができたのだ。

さて、最後にまとめとして全日程を終えて私が今感じていることについて述べる。私は被災地巡検を通して以前まで関心をもてていなかった防災についてもっと知識を深めたいと思った。それと同時に、1人でも多くの人に防災の大切さを知って欲しいとも強く思っている。だが私は巡検で伝えることの難しさも痛感した。いくら調べ物をして、どれだけ話を聞いても、現地に行かなければその衝撃は伝わらない。衝撃が伝わらなければ震災や防災にもっと向き合おうとも思えない。それでも私たちには現地を見て、聞いて、感じたこと、そしてその思いをつなぎ、紡ぐという使命があるのだ。私はまず家族など、身近なところに防災の大切さを伝えていきたいと思う。また、学校の防災意識も変えていく必要があると思っている。自分1人でできることは少ないかもしれない。だからこそ今回共に被災地巡検へ向かった仲間と協力して、今後防災の輪を少しずつ広げていきたいと思う。